

## 自他に向き合い、コミュニケーションを

### 図ろうとする態度を育む指導

#### —自他の表現の吟味から、適切な表現方法を磨き合う授業づくり—

秋田県立秋田北高等学校 笹淵 夏子

#### 1. 秋田大学教育文化学部附属中学校での実践を振り返って

平成24年から2年間、秋田大学教育文化学部附属中学校に勤務する機会をいただきました。平成25年度の「感化し合う・磨き合う学び」という学校全体の研究テーマのもと、公開研究授業を行いました。附属中学校では、講義形式ではなく、生徒同士の関わり合いや話し合い活動が大変積極的に授業だけにとどまらず教育活動全体を通して行われていました。高校での勤務経験しかなかった私にとって、附属中に着任時は「関わり合い」「学び合い」「話し合い」といったフレーズは新鮮であったと同時に、大きな戸惑いを感じさせるものでした。こういったフレーズから当時私が連想できたものはペアワーク・グループワークといったことくらいで、実際何を・どのように行い、どのような観点から自身の授業改善へと繋げていけばいいのか、試行錯誤の日々でした。迷いながらも、当時の附属中学校で「英語が好き」と言ってくれる多くの生徒たちに恵まれ、現在様々な場面で取り上げられている共同学習やアクティブラーニングなどにも通じる経験をさせていただいたように思います。また附属中職員の先生方をはじめ、秋田大学教育文化学部の佐々木雅子先生、若有保彦先生、中央教育事務所の相馬 仁指導主事にもたくさんのご指導をいただきました。ご指導・ご助言いただいたことをもとに附属中学校での実践を振り返りたいと思います。

#### 2. 「互いに伝えあい、表現力を高めあう」ために

～原稿作成からプレゼンテーション発表の学習活動を通じて、互いに磨き合い（学び合い）、表現力を高めるプロセス～

1. 「場の設定」を適切に行い、生徒が「話す・書く」意欲を持てるようにする
---------------------------------------

生徒の「話してみよう・書いてみよう」という動機づけのためには、生徒が楽しく感じるようなトピックの設定が欠かせません。教科書の日本文化に関するユニットに関連して、「日本なるほど文化遺産に登録を目指せ！」というテーマのもと、最終ゴー

ルを秋田大学の留学生の方々を審査員に迎えてのプレゼンテーションに設定しました。生徒は日本おもてなし観光庁（もちろん架空です）の職員として、日本で大切だと思う食べ物・行事・便利グッズ・施設などを日本なるほど文化遺産委員会に登録申請し、委員会を納得させるようなプレゼンテーションを考える活動に取り組みました。

## 2. 段階的な指導により、原稿を再構成・修正し、よりよい表現を探る

日頃より生徒には、

☆自分の知っている表現でメッセージを伝えようとする事

☆相手にとって情報価値が高く、具体的・詳しい文を書くこと

☆相手にとって分かりやすいように文と文の関連性に注意して文章を書くこと

を継続して指導していました。生徒が情報を発信・表現する際は、常に「相手（情報の受け手）」を意識することが欠かせません。様々な活動を通じて、コミュニケーションの相手を意識させることが「相手に伝わる」プレゼンテーションをはじめとする情報発信につながります。

プレゼンテーションに向けてのスタートとして、ALT の書いたイギリス文化（ビートルズ・ハリーポッター）に関するモデル文を提示し、生徒たちがどんな原稿を完成させなければいけないのか具体的にイメージできるようにしました。実際の原稿の作成に当たっては、初めに個別に一人一人作成させることとしました。また「考える・内容を深める」と「文法等に注意を払いながら適切に表現する」ことを分け、生徒が過度の負担を感じずに段階をふみながら徐々に原稿完成を目指せるようにしました。そのため教師が原稿を回収し、添削・チェックする際には1回目は内容面（fluency）に重点を置いてできるだけ生徒の発想を広げるようなコメントや質問を添えること、修正した2回目の原稿は言語の形式面（accuracy）に重点を置いて添削するようにしました。

## 3. 学習過程に、自己評価・比較すること・相互評価の機会を適切に設定し批評する力を高める

英語科の第一目標は、生徒の英語運用能力を高めることはもちろんですが、現在は全教科・科目において基本的な知識技能を活用して、課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが求められます。そういった力を英語科の授業の中で育むため、自分で書く情報の取捨選択・理由のランク付けなどに始まり、自己の作品を前後で比較させたり、自己と他者の作品を比較させることで、プレゼンテーション完成を目指すとともに、思考力や判断力、表現力を高めることを目指しました。

生徒の文章を読むと、主題文があって、つなぎ言葉等を使ってそれらしい理由が述べられていても、他者を納得させるような説得力のある文章だとは限りません。書くことによって自分の考えが可視化され、自分の書いた作品をもう一度客観的に見直すことを通して、より一層考えを深めたり、足りない面はどこかを考えたりすることが期待されます。生徒たちを主観的なつぶやきの表現の羅列から一步ステップアップさせることを目指し、情報の受け手に重点を置いて「相手を説得して、納得させる」視点にこだわって、原稿を練り上げるよう指導しました。ALT のモデル文を活用させ、subjective reasons / objective reasons を区別させるウォームアップ活動を行い、日本なるほど文化遺産登録を目指すもの・行事・施設などが生活にどのように役立つのか、どんな価値・長所をもつのか、あなたが長所として考えたことは他の人にも同じことが言えるのか（当てはまるのか）といった項目を確認させました。とくに「他の人にも同じことが言えるのか（当てはまるのか）」という点を重視し、自己・他者評価させ、情報の受信者の視点で文章が組み立てられているかを繰り返し確認する機会を設定しました。

自己評価（相互評価）させる際には、どのような評価の観点・評価項目を設定するかが、ライティングの作品やプレゼンテーションの仕方はもちろん、生徒の思考の深まりにも大きく影響するように感じました。「他の人にも同じことが言えるのか」「受信者にとって新しい視点、または新しい情報が提供されているか」などの項目に沿って自己点検させましたが、やはり自分の文章を客観的に見ることには限界があります。そこで個人で原稿を完成したのち、グループ内で一番よい原稿を選び、グループで1つのプレゼンテーション原稿とさせるため、読み取った内容やその印象について話し合い、書かれた内容がどのように伝わっているのかを確認する相互評価を設定しました。ここでも評価シートを用いて、評価の観点は確認したうえで行かせます。相互評価の生徒のコメントには「文章の構成は良いが、具体例が少なく、挙げられている理由も主観的だ。」「これは下線部の具体例と言えるのか？つながりが分かりにくい」「原稿が“事実”と主観的な“感想”だけで成り立っている。説得力のある理由がない」といった厳しいコメントから、「外国のお菓子との比較をしてみるといいかも」といった相手の原稿の改善点を示唆するものまでありました。相互評価を通して、中学生らしい内容の広がりや深まりが、プレゼンテーション原稿に出てきたように思いました。

相互評価を成立させるためには、日頃から繰り返し練習することが必要だと思いました。どのような項目に沿って評価し、どのようなコメントを書くことが期待されているのか練習することで、相互にコメントし合い、批評する力を高め、学び合いがより一層促進されるように思います。

また相互評価・学び合い・話し合い活動を行わせる際には、どんなところに気づかせたいのか、その話し合い・交流活動は次のステップの何につながるのか、生徒のどんな力の高まりを意図しているのか、常に学び合いを何のためにさせるのかという視点を教師が持つことが必要であるとのご指導を様々な場面でいただきました。共同学習やアクティブラーニングを日々実践されていらっしゃる先生や小・中学校の先生方には当然と思われることかもしれませんが、学び合いといった概念をほとんど持っていなかった私にとって、本当に大切なことを学ばせていただきました。

#### 4. 情報の受け手を意識し、相手に分かるように伝えること

コミュニケーションでは「相手（情報の受け手）」の視点に立つことが大切になりますが、私は附属中学校での実践をするまで、私自身のその点に関する意識はとても低いものでした。また附属中学校の生徒たちはどうかというと、何かについて書かせようとすると、意欲的にどんどん和英辞典を引いて書いて作品を提出するものの、教員にも何が書いてあるのか分からない作品のため相互評価をさせるには適さない、などの状況がみられました。そこで情報を伝えたい相手は誰なのか、特に生徒同士の場合は本当にその表現で相手に分かってもらえるのか、を継続して考えさせるようにしました。情報の受信者の視点で、文章や情報を組み立てられているのかを確認させるため、「主観的な理由・客観的な理由を分類して、どれが相手にとって説得力をもって訴えることができるのか」「おもしろい！なるほど！それは知らなかった！という受信者を楽しませ、最後まで飽きずに読んで（聞いて）もらえる情報・工夫があるか」について、プレゼンテーション原稿を発表前にグループ内で評価させることを何度か行いました。

また書いて文字を通して伝えるのか、話して音声で伝えるのか、という伝える具体的な場面を想定させることも大切だと感じました。特にプレゼンテーションのような音声で伝える場合は、プレゼンテーションをしたときにもしかしたら分かりづらい（聞きとりづらい）箇所はないか、分かりづらい文の時はどんな工夫・サポートをすれば相手に伝わりやすくなるのか、をプレゼンテーション練習の際に確認させ、キーワードを書いたカードやピクチャーカードなどを準備させることとしました。原稿を書く際の「相手に伝わるような表現」をさらに発展させ、「相手に効果的に伝わるような表現・プレゼンテーションの仕方」につなげるよう指導しました。

#### 5. 良いリスナー（情報の受け手）を育成すること

英語科の中で、相互評価や学び合い・関わり合いを成立させるためには良い受信者

の育成が欠かせないことを、様々な先生方にご助言いただきました。受信者の雰囲気や反応は発信者の表現意欲にもつながっていきます。生徒の情報の発信者としての積極性を引き出すうえで、受信者の態度が大切です。この点において、中学校の先生方は本当に日頃から熱心に取り組み、教室内でのペアワークやグループワークを行われていると感じました。受信者としての反応(reaction)を示すことは、附属中学校の生徒たちは全教科を通じて指導されており、他生徒の発表に対する反応も自然に出ることが多かったように思います。日常において「リアクションを示そう」といった指導に加えて、「他の人の発表をしっかりと聞きましよう」という呼びかけにとどまらず、授業では教師が「積極的に他者のプレゼンテーションを聞こうとする仕掛け」を作ることが求められます。そのため各グループの発表後に約1分で評価シートを記入しコメントを書く活動を設定しました。評価項目としては主にプレゼンテーションのdeliveryに関する「相手に分かりやすく伝えるための工夫」が実践できているかに基づいて評価するとともに、プレゼンテーションのどんなところが特に良かったのか、どんな点を改善したら、よりよいプレゼンテーションになるのかをアドバイスすることとしました。制限時間つきでプレゼンテーションに関する質問や簡単な感想・コメントを述べることにより、英語のfluencyの伸長もねらうこととしました。また話している言葉は記憶に残りにくく、「全体的に分かったかどうか」程度しか評価できない場合が多いとのご指導をいただき、全てのプレゼンテーション発表を聞き終えた後に、プレゼンテーションの内容・アイデアを確認させるため、各グループのスクリプトを配布し、おもしろいと思った箇所・新しい発見があった箇所にアンダーラインを引かせることとしました。音声によるインプットの次に文字によるインプットを与えることは、生徒が自己の音声理解度を再確認する機会であると同時に、accuracyも対する意識を高める機会としても活用することができます。「この部分はこんな表現が使われていたのか」「自分もこの表現なら使えそうだな」など、生徒の学習意欲につながるようなaccuracyに関する指導をこれからも行っていきたいです。

### 3. 課題とこれから・・・

以上附属中学校での実践を振り返りましたが、課題として（今現在の勤務校においても課題であります）、聞き手が発表者に対して「ここがよくわからないんだけど質問してもいいですか」「つまりそれはどういうことが、もっと説明してもらえませんか」と求めるなど、生徒の英語によるコミュニケーションを維持していく力の育成が挙げられます。プレゼンテーションなどの英語による発表では、情報の受信者を意識した指導を行わないかぎり、どうしても一方的なコミュニケーション（発表者→受信者）

になりがちです。発表する際の緊張によって声が小さかったり、暗記した原稿を早く言い切ってしまう気持から早口になり伝わりにくくなったり、聞き手も相手に十分注意を向けなかったり、様々なことが考えられます。結果として、発表者も聞き手も充実感も持てずに次につながらないことを一度は英語教員は経験していると思います。発表者が聞き手が理解・反応しやすい発表にする、または聞き手から反応を得やすいやりとりを発表に盛り込むことはもちろん、聞き手から発表者に対する働きかけをより促進するために、分からなかった時に使う文例・クラスルームイングリッシュなどを示しながら、生徒が自ら積極的に新しく情報を取得し、理解を深められるように指導する必要性を感じました。このような聞き手からの反応・やりとりが発信者の表現意欲や表現力向上につながるのはもちろん、聞き手にとってもさらなるインプットの取得につながり英語運用能力を高めることにつながると思います。

また accuracy について深化・補充し、表現力を高める指導は、その単元の終末活動が何であれ、必須となります。発表原稿を教師が添削して accuracy に対する意識や理解を深めることも可能ですが、ある生徒やグループの作品をモデルとして取り上げ、クラス全体で推敲するなどが考えられると思います。とくに生徒がお互いの働きかけや学び合い・コミュニケーションを通して、accuracy も含めた自己の英語表現力を磨いていくことができないか、考えていく必要があるように思います。

さらに、言語活動と言語学習をどれだけ一体化させていけるか、ということを感じています。小学校や中学校の先生方は、適切な終末の単元活動を設定し、生徒にも明示したうえで「使わせながら学ばせる」仕掛けが非常に上手であるように思いました。高校の授業においても、使いながら学ぶ工夫が教師にますます求められているように思います。